武蔵野日曜集会

道・理・生

――ヨハネ伝第14章1～19節――

１９８４年11月18日（武蔵野）
小池辰雄

別れの大告白　神を身ずる　道・理・生　三相一如　「お前もその道になれ」　至道無難禅師
ただ一人の本もの　私を見た者は神さまを見た　「我を身ずる者は我がなす業をなさん」　助け手

【ヨハネ14・1～19】

1『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2わが父の家には住処おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処を備えに往く。3もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4汝らは我が往くところに至る道を知る』5トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道を知らんや』6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。11わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。12誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15汝等もし我を愛せば、我が誡命を守らん。16われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18我なんじらを遺して孤児と

はせず、汝らに来るなり。19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

●別れの大告白

今日から、キリストの「訣別遺訓」と普通言われているところの、地上の最後の言葉は――要するに遺言です。14章から17章まで――私は「遺訓」なんて言いたくない。訣別の大告白です。本当は、ヨハネ伝13章31節から始まっている。

「31 **ユダの出でし後、イエス言い給う『今や人の子栄光をうく、神も彼により て栄光をうけ給う。**」

と。ここから始まっているわけです。こないだ、13章34節の「新しき誡命」を「新誡」と題して話したわけですが、これは訣別遺訓の、別れの大告白の大前提なんです。

「**互いに相愛せよ**」

と。この愛は新しくして古びない新しさです。愛するとは互いに助け合うこと。「助け合い運動」なんていうけれども、あれは全くキリストから来ているわけです。日本語では「新しい」という字は一つしかないけれども、ギリシア語では「ネオス」と「カイノス」という字があって、この場合は「カイノス」の方です。「アガペー・カイネー」「新しき愛」、古びない愛です。

文学がなぜ古びないかというと、人間の心の世界は要するに古びないんです。知識の世界は古くなる。とにかく、自然科学の方は日進月歩で、もう二、三年前の説は、新しい説が出てくると、乗り越えられてしまう。学問でもそうですよ。聖書の研究でも、学問的な研究というのは、古いのはそれで――枠のことですよ、聖書の研究と言ったってね――枠的な研究は、古いのは役に立たなくなってくる。ところが、聖書のそういった文献学的な研究ではなくて、聖書そのものの新しさというものは、何年たっても絶対に古びない。聖書の真理がそのようなことであるということは、やはり魂の世界に関わるからです。魂の世界、心の世界に一番関わっているのが文学だから、それで文学は真理を表現するのには一番素晴らしい形式になるわけです。

●神を身ずる

1 **『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。**

人間はどうも心を騒がせる。この場合の「心」というのは「カルディヤ」という字が使ってあります。普通の心、「ヘルツ」です。波のように打つわけです。騒ぐ。この「騒ぐ」という字は「思い悩む」という気持が入っているような字です。

「神を信じ、また我を信ぜよ」と。

「神の中へ入っていく。神の中へと信じ入れ」

という言い方です。「信ずる」という言葉を私は、「身入」、「信入」と書く。身を入れる。信じ入る。

「全存在で神の中へ自分を投げ入れろ」

と。「神を信じ、また我を信ぜよ」と。神さまが有ることをいくら信じたってダメですよ。有神論とか無神論とか、そんなことをいくら議論したってしょうがない。

コロサイ書1章15節に、

「15**彼は見得べからざる神の像にして、万の造られし物の先に生まれ給える者なり。**」（**コロサイ1・15**）

とある。キリストは神の現象体であるということです。だから、神の現象体なるキリストの中へ、また神の中へ自分を投げ入れろと。

「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。神と我とは一つだから」

と。私たちは空気の中に投ぜられている者、投ぜられたる存在です。ハイデッガーや何かが言う、

「世の中に投ぜられている者、存在」

ということ。私たちは、

「世の中ではなく、神さまの中に実は投ぜられている」

そこまでは言わないんだ、ハイデッガーやフッサールだとかは。そこへいくと、キエルケゴールやヤスパースの方がなお近い。けれども、一番そこへ行っているのは何と言っても、キリストの直弟子です。その現実に彼らは――理論ではない――本当にそこに生きていた。だから、

「エン・クリスト」（キリストの中に）

「エイス・クリストン」（キリストの中へ）

ということです。私が無教会にいたときに無教会は絶対にそういうことを言わない。ただ

「信ぜよ、信ぜよ。信仰によって義とされる。十字架を仰ぎ見よ」

と言う。ダメだよ、そんな程度では。しゃっちょこばってしまってね。

私たちは空気の中に投入されている存在なんだ。魂が神さまの中に投入され、キリストの中に投入されないで、なぜ生きていられるか。はっきりしているでしょ。肉体は空気の中に投ぜられ、空気をまた吸い込んでいるでしょ。それと同じで、魂が、全存在が神の中に、キリストの中に、永遠の生命の中に入れられて、そこで魂が呼吸するようなところ、それが本当の祈りです。

だから、「祈り入る」と言う。何でも入らなければダメです。外側ではダメなんです。全部、中へ入ってしまう。祈りの世界でそういう世界を瞑想しながら入ってしまう。だから、

「なんじら心を騒がすな、神を身じ、また我を身ぜよ」

と。「身ずる」なんて、こんな言い方するのは、どこへ行ったってないですよ。

2 **わが父の家には住処おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処を備えに往く。**

神さまの家は、「住処おおし」でね、地球上みたいにせちがらい世の中ではないんだ。地上は住宅難だよ、特に日本は。大変だ。若い人が家を造ろうと思ったら、一生かかってだんだん返済していかなくはならない。返済し終った頃には人生が終ってしまうんだから、冗談じゃないよな。何だってこんなに政治が悪いかね。ドイツでは真っ先に、ドイツの政府は戦争に負けてから一番先に庶民の住居問題をやった。こっちは大きなビルディングばかり建ててしょうがない。日本の政治は、「民主主義」なんて言ったって、本当に民のことを思っているか。「民主主義」なんていう言葉は、私は大嫌いだ。もう観念が間違っているから。「デモクラシー」というのは素晴らしい内容の言葉だけれども。そんなことを私は言うものだから、嫌われるんだね。

神さまの所は無限に広いから、

「住処おおし。汝等のために処を備えに往く」

と。お前たちの場所を備えに行くと。私たちの場所も備わっている。

3 **もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、**

これは御霊でやってくる。もちろん、キリストは再臨のことも兼ねて仰っている。再臨の前には聖霊がやってくる。聖霊降臨、それから再臨です。昇天、聖霊降臨、再臨となるわけです。だからもう、本当に世の終りは近いという気持でキリストは言っておられるわけです。

「復きたりて汝らを我がもとに迎えん」

と言うんです。そこにいる「汝ら」ですからね。では、キリストの預言は当たらないか。そうではない。キリストの預言は、こういう言葉は世の末までも、「汝ら」と言って、その時の「汝ら」は私たちに対しても「汝ら」なんです。その時の「汝ら」はひとつのサンプルにすぎない。

わが居るところに汝らも居らん為なり。

一緒にいるためだよと。

●道・理・生

4 **汝らは我が往くところに至る道を知る**

往くところは分かっているだろと。

5 **トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道を知らんや』**

正直にそう言った。どこへいらっしゃるかわからない。分かりませんよと。

6 **イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、**

有名な言葉ですね。みんな定冠詞がついてます。

「私こそが道である。私こそが真理である。私こそが生命である」

と。それを今日は「道・理・生」と書いた。

キリスト自身が道なんです。「道」というのはヘブライ語では「デレック」という。イスラエルへ行くと、よく「どこへの道」と標識に書いてある。「道」という字は、キリスト教でも仏教でもユダヤ教でも非常に大事な字です。サンスクリットでは「ガティ」という。「ガティ」というのは、「歩く、行く、赴く（おもむく）」という意味を持っている語の名詞だそうです。仏教の方でただ簡単に「道」といったら、「仏道」のことです。

だから、キリストも「道」と言えば、これは「キリスト道」のことなんです。

「私は道なり」

と。道を身につけなければ、どうしようもない。

「我こそは道なり」

というんだ、定冠詞が付いているから。

「自分を通らなければ、神さまのところに行けない」

と。そういうことをはっきり言うんだからね、キリストは。これは主観ではない。自分は何ものでもなくて、神さまがやってきたから、「我は道なり」というのは

「我は神の道なり」

ということだ。

「神さまが造った道なので、私が造った道ではないよ」

と言うんだ、キリストは。そういう完全に無的な自覚だから、はっきりとそれが言える。主観だったら、言えない。それはいわゆる客観でもない。それを本当の主体という。神主体の自覚なんです。我々はキリスト主体の自覚でなければいかん。「私の信仰は」なんて言って、自分の信仰なんか省みたってどうにもならんです、そんなものは。自分が空っぽだから、やってくるものは空気だから、キリストの気だから。これはもうはっきり告白せざるをえない。力が働かざるをえない。

「道」は、「への道」なんだ。何々への道であると同時に、その到着点もちゃんとつかまえているんだ、この「道」というのは。だから、たとえば「茶道」と言えば、お茶の世界という意味になる。仏道と言えば仏の世界。そういう空間もひっくるめて、出発点と終極点と両方ひっくるめて、その全体を「道」という。キリストは神への道であると同時に、神を現しているところの世界です。

無道はいいんです、道無き道を行くから。不道、非道はいけない。道に非ざることをしてはいかん。道無き道を行くのが無道の道です。鳥は無道の世界を歩いているではないですか。鳥には道がない。空中は立体的にどこを飛ぼうがいい。私は人間でなかったら、鳥になりたいね。人間は地上しか動けないから。どんな飛行機を造ったって鳥にはかなわないよ。まぁ、自然は素晴らしいものだね。あの微妙な羽は風を利用してどんどん走っていく。

もの凄いことだ。やっぱり、生命の世界というのは素晴らしい。

●三相一如

その次に、「真理なり」とある。「真理」と言うと、我々にはすぐ観念的にひびく。理屈みたいに。「理」というのは「則（のり）」と同じ。天野先生は「道理の感覚」と言って、「道理、道理」と仰ったけれども。理法です。理にして法。理と法は同じこと。「ダルマ」という。これもサンスクリットだ。宇宙の大法。法則です。物理的な法則、道徳の法則、霊的法則。霊法、道徳法、自然法。全部このダルマです。それが「理」。その法からはずれると不法者になる。無法はいいんだよ、無法の法というのは。絶妙な法の世界だから、無法というやつは。

法律というのは律するんだ。律するから困るんだよ、この「律する」というやつが。律法になるから。決めてしまうから。「モーセの律法」なんていうのが、人間が頭で決めたような「律」になったから。律法はやむをえずして語るけれども、その語っている奥の世界が本当の法の世界なので、それで困ってしまうんだよね。無限定の世界から、無律、律せざる世界から本当の律が出てくるんだ。だから、本当の法哲学というのは、素晴らしいものができるはずなんだよな。いわゆる法律いじりではダメなんだ。

「我は法なり」

ということは、

「我は法を体現する者なり」

ということです。

「我は真理なり」

というのは、

「私は真理を体現している者だ。私自身は活ける真理だ。私自身は活ける道だ」

というわけです。最後に「生命」という字が来ているのは、そうなんですよ。すべて生命的なんです。その生ももちろん霊生です。霊的生命。霊生ある者が本当の道を現じ、本当の真理を現す。真理を体現している。だから、この「道・理・生」は離すことができない。

「我は道なり、我は真理なり、我は生命なり」

と言ったって、三つのことではない。これも三相一貫ということだ。三つの相が一貫している。三相一如と言ってもいい。

「我は三相一如の者なり」

と。

「我は、道・理・生、三相一如なり」

と。まぁ、キリストというひとを福音書で見ていると、そうだものな。ダルマを、法を体現している。これはお釈迦さんがそうだ。お釈迦さんとキリストです。

これはもう古くして常に新たなんだ。そういう世界からはずれてしまったようなことに

今はだいぶなってきているんだよね、人間の心の、魂の感覚が。もうコマーシャリズムでおかしなことになって、へんてこなマンガがはやってみたり。

あの歌舞伎の玉三郎というのはやはり偉いな。私は彼の言うことを聞いていて、なるほど凄いなと思った。

「初めの歌舞伎の古さの中に、実は古さでない常に新しいものを本当にしていけば、それが自ずから現じていくんだ」

というようなことを彼は言っていたが、正に然りと思った。我々の真理と同じことだ。我々は何かテレビで聞いていても、このキリストの光でもって、キリストの真理で聞いたり見ているから、ちゃんと分かる。オリエンティーレンできる。位置づけができる。あそこまでは本当だけれどもその先はダメだななんて。

●「お前もその道になれ」

「そうですか、キリストさまはそういう方ですか」

では困るよ、あなた方は。キリストは、

「我は道なり、真理なり、生命なり。お前もそうなれ。お前もその道になれ、その理になれ、その生になれ」

と。

「とてもなれません」

では、どうしたらいいか。キリストの中へ入るだけだ。だから、

「我によらでは父の許へ行くことができない」

と。この我というキリストは無限無量なるひとだからね。

「無限無量の中に入っていけば、お前らしさが一番よく現われる。お前という特殊性において普遍的なるものが現われる。滅びないものが現われるぞ」

と。皆さん一人びとりがそういう天品なんです。天品、神品です。

私は今日特に「天生」なんて書いた。何でも「天」の字が付く。私の号は無限にあるんだ(笑)。天生、天に生きる。来年からはもう私は天界に入ってしまいますからね、シラーが「芸術家」という詩の中で言っているように。ゲーテも言っているけれども。要するに、本当の詩人は天界に入ってしまわなければ、本当の詩は生まれてこない。天界に入って、それで地上はどうでもいいと言うのではないよ。そうすると、本当に地上が見えてくる。道なんて言ったって、私なんかは、道は全然ダメだ。そこらを歩いたって、わからない。すぐ忘れてしまう。ところが、上から見ていれば、どうなっているかちゃんとわかるんだ。上からみて、地図が見えるようになる。

藤井先生が『羔の婚姻』を書いて、黙示録のまだ三分の一くらい行ったか行かないかのところで仆れてしまった。一番大事なところが残っている。地獄は、ダンテが素晴らしい

地獄を書いたから、私はもう地獄を書こうとは思わない。天界だけです。

「我はキリストの道なり、真理なり、生命なり」

ということが言えるわけです。破れているから言えるんです。破れなかったら言えないですよ、自分が破れていなかったら。私はその意味で今度は、「破れ」という言葉が非常に積極的な言葉になった。整ったような顔していたってダメだよ、バカづらしていなければ。破れです。

「もう成り上がったものはダメだ」

とゲーテも言っているとおり。「ゲボルデン」（成ったもの）はダメだ、「インマー・ベルデン」（常に生成展開してやまず）ということ。麦の種は地に落ちて破れなければ、根が生えないし芽が出てこない。

「**一粒の麦地に落ちて死なずば**」

と言われた。あの「死なずば」というのは「破れる」ということ。

「自分自身が破れろ。そうしたら、キリストが根を張ってくれる、キリストが芽を出してくれる」

と、そういうことです。

「男は大木となれ、女はきれいな花となれ」

というわけですよ。

●至道無難禅師

至道無難禅師というのがある。至道無難禅師が飯山の城を訪ねました。その殿様の子供が三人いて、この禅師に

「仏様の絵を描いてください」

と言ったら、三人のうちの二人にはちゃんと仏様の絵を描いてくれた。ところが、一人の子供には描かない。

「なぜ、描いてくれないか」

と。そうしたら、

「お前には仏を描いてやる必要がない」

「なぜですか」

「お前のお腹の中には観音様がいるよ」

と言った。お前の中には観音様がいるから、お前には書く必要がないと。さすがは、この坊さんは少年の本質を見ているんだ。

「観音がいる。だから、お前はその観音を見いだしたらいい。観音を見いだせば、わかるから。それまで私は待っているから」

と。それで、それ以来、その少年は三年間日夜、観音は一体自分のどこにいるのだろうか

と考えた。考え求め便所の中でも瞑想して、なかなか出てこない。あるとき、お城だから、客を招いて二階で饗宴が始まった。そして、この少年はお手伝いして、お膳を二階に運ぶ。ところが、最後の一段を踏み外して、ご馳走ものともすってんころりんと落っこちて気絶してしまった。水をかけて大騒ぎ。そして、やっと気がついた。そしたら、この少年は「あははは」と笑った。ということは、その時に大悟したという。一切を棄ててかかるその境地がわかったという。もう自分でのぼるのでも、お膳でもないと。自分が本当に棄てられたわけですね。それでもう、ああうれしいと言って笑ったという。これが後の正受和尚です。白隠の先生です。だから、正受和尚の本質を至道無難禅師はちゃんと見ている。

「お前の中には仏がいる」

と。これがまた白隠を鍛えてやった。だから、無難、正受、白隠と三段になっている。

即ち、これは体のうちに宿しているでしょ。

「わがうちにキリスト在り」

「わがうちに仏あり」

という。これが本当の世界です。自分がぶっ倒れたり、ひっくり返ったり、破れたりしなければ、わからない。人間はどこかへぶつかって、ぶっ倒れるまではわからないんですよ。頭でわかる世界ではない。からだで感ずる世界、体感する世界だから。

「ゲフュール　イスト　アッレス」（体感が一切である）

とゲーテが言ったのを、私は「体感」と訳したいのはそういうわけなんです。全存在で感じろというのが、それが本当の「ゲフュール」だ。単なる「感情」ではない。そういうことはドイツ文学の人たちはわからないんだ。誰も「体感」なんて訳さない。ゲーテが、

「小池は私の本当のことを言ってくれた」

と、天界で思っているでしょう。もう私の中には異言がグッと来ているんだけれども、今はこらえている。そういう世界です。

そして、この正受老人が白隠を鍛えて、

「さぁ、お前は今度は自分でやれ」

と。そして、白隠を二里も送って行った。それで、

「あまり無理するな。本当の仏法を説け。もう自分は老い先長くないから、これでもうお別れだ」

と。自分の死期も大体わかっているんだよな。

「私は一生の願いをお前に言う。お前は本当の弟子をただ一人でいいからつくれ。いい加減なものをたくさんつくるな。本ものを一人つくれ」

と。これが正受老人の白隠への最後の言葉なんです。

●ただ一人の本もの

歴史を動かしているものはみんな本ものです。ただ一人の本もの。マルチン・ルターがそう。パウロがそう。皆さんも、その本ものになっていただきたい。この中で「ただ一人」なんて、私は言っているのではない。一人びとりがその「ただ一人」という、ただ一人になってくださいと言っている。その「ただ一人」というのは質的な意味であって、ただ数えて言っているのではない。

キリストは本当の唯一人者なんです。ただ一人のひと。アウグストゥスという世界の第一人者がいたときに、第一人者ではない、ただ一人のひとが現れた。これはキリストである。ただ一人のひとから無数のキリスト者が現われてきた。だから、一即無限、ゼロ即無限。キリストというただ一人は神さまの無者である。この場合の「無」と「一」は同じことです。

ちょっとも不思議ではない。あなたがたはみんな指紋が違うでしょ。みんなただ一人なんだ。世界でただ一人だ。何億人いても、指紋が同じのがいないというんだから、不思議な話だね。神さまは絶妙なものだ。だから、

「神さまは最大の芸術家だ」

と私は言う。一人びとりは掛け替えのない存在としてつくられている。それがなぜ、本当にただ一人のひとにならないか。類型的なことをやっているか。似たようなことをやっているか。ダメだよと。その「ただ一人」が集まると、百花繚乱となる。

この頃の民主主義みたいな身勝手主義とは違うよ、この「ただ一人」というのは。そういった使命的存在なんかひとつも考えてないものね。みんな自分さえよければというような考え方だ。もう日本なんかひっくり返れと言いたくなる。本当だよ、藤井先生が言ったとおり、

「日本よ、滅びよ」

だ。だから、そういうときに、我々はこの掛け替えのない福音を受けとったら、そういう存在として、そういう使命に烈々として燃えなければいかん。私はもう本当に火の如くだからね。そのうちに燃え上がってしまうのではないかと思う。「おらずなりき」なんて。

「先生は炎になってしまった」

なんて。

そういう、仏さんを腹に宿していたような正受老人のように、我々はキリストを腹に宿している。これがキリストの直弟子たちの次元なんです。もう今のキリスト教なんていうのはすっかりズレている。みんな悪いと言っているのではないですよ、ただズレていると言っている。

「ズレない次元のところに限りなく進んで行きましょう」

ということ。これでいいなんていうところはないですよ。

●私を見た者は神さまを見た

我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』

もう、キリストはその結論まで言ってしまっているんだ。知っているではないかと。すると、ピリポが、

8ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』

「お父さんを示してください」なんて、またこんなとぼけたような質問をしている。

9イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、

これは大事な言葉です。

「私を見た者は神さまを見たんだよ。私を見ないで、『神さま』なんていくら言ったってダメだよ」

と。大変なひとです。

私たちは一日のうちのあるときには本当にキリストになる。けれども、しょっちゅうキリストなんていうわけにはいかんですよ。いかんけれども、その波風が立っている奥にはちゃんとあるんです、キリストは。それが本当の不動の信なんです。人間小池は、波は打っているけれども、その奥に人間でない小池がいる。それは不動なんです。それがはっきり言えるんです。それは恩寵の世界だから。絶対恩寵の小池というのがここにいるんだ。こっちは相対的な小池というやつ。この相対的な小池を見て、

「小池先生はどうだこうだ」

なんて、くだらないことを言っている。何と言われたって構わないんだ、私はそんなことは。私はもうこっちの方（絶対恩寵の小池）で動いているから。何と言われようと弁解はしませんよ、そんな次元ではありませんよ、というわけです。そういう絶対矛盾の自己同一ということです。私は何も、ごまかしているわけではない。本当ですから、これは。

この道なるキリスト、真理の体現者。自分自身が道であり、自分自身が神さまの命である。孔子もこういうことを言っている。

「君子の道なるもの三つあり。われよくすることなし。」

と。やっぱり、孔子さんはそういうことは分かっているんだ。「我は無能である」と言う。やっぱり、達しているひとはちがうね、言うことが。

「仁者は憂えず。智者は惑わず。勇者は恐れず。」

だけれども、私はダメなんだ。我は無能なりと。これが本当の道だと言う。

「子貢曰く、夫子は自ら道なり。」

お弟子さんの子貢は、

「ああ言うところの先生はみずから道である。自分が道なんだ。だから、ああいう

ことを言われるんだ。自分は何もできないと言った孔子自身が本当は道だ」と。素晴らしい問答だね。論語に出ている。論語だとか老子だとか、また読むとおもしろいですよ。みんな福音の光でわかるからね。

我を見し者は父を見しなり。如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。

これもそうでしょ。

「我の父に居り、父の我に居給う」

と言う。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と同じことなんです。「われ父のうちに、父わがうちに」と。その相互内住関係です。もう、この15章に行ったってそうですけれども、キリストの世界は本当に一如の世界ですから。

今のキリスト教はズレているからダメだ。「ダメだ」ということは、なにも「間違っている」とは言わないが、次元が低い。真理性がうすい。観念である。ご馳走が出て、このご馳走は何カロリーだなんて、そんなことばっかり研究している。食べたらいいんだよ。食べないでいて、いくら研究したって、お腹は満足しやしない。

●「我を身ずる者は我がなす業をなさん」

仏教でいう「六道」というのもそうでしょ。地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、最後は天道です。六道のうちの最後のこの天道にならなければダメです。今日は私の号に「天生」と書いたのは、地上にありながら本当に天に生きている。これ天生です。

わが汝等にいう言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。

また、

「父われに在して御言を語りたもう」

と。もうはっきりしているんだ、キリストは。だから、ヨハネ伝は大事ですよ。もういかにそういうがはっきりしているか。

11 わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。

また繰り返し言っておられる。

もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。

仕方がないから、私のやるところを見たら、そうしたら信じろ。しょうがないやつだなと。実は、キリスト自身が神の業ではないですか。業の業なんだよ、キリストのなさることは。言の言なんだ。私がここでしゃべっているのはみんな聖霊の言ですからね。御霊から来ているんですから。自分で考えてものを言っているのではない。

「わが業によりて信ぜよ」

なんて言われたら、おしまいなんだ、本当は。キリスト自身が神の徴なんです。キリストのなさることは神の徴の徴なんです。忘れないでくださいよ。

「言の言、業の業、徴の徴、道の道、真理の真理、命の命」

もう、あなた方は、語るも聞くも同じこと、もの凄い世界に入っているでしょうね。そうしたらもう、

「身体の具合がおかしかったのが治ってしまいました」

というのが本当にそうですよ、本当に全身で受けとっていれば。私は観念でものを言ってないんだから。

12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信（身）ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、

と、はっきり、キリストは言っている。「私を信（身）ずる者」は、さっきの「しんずる」というはみんな「身」という字ですよ。まちがえては困るよ。「信仰」の「信」ではないんだ。

「私を身（からだ）する者は、我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし」

「私はお前の中に入って大きな業をするぞ」

ということですよ。キリストよりか大きな業を我々は手放しでできるか。

「私はお前の中に入って、いよいよ大きな業をするぞ」

「はい、どうぞ。お使いください」

と、それだけのはなしです。「遣（つか）わされたる者」というのは今度は、使われたる者になる。キリストから使わされたる者。

われ父に往けばなり。13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14 何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。

「名によりて」ではなく、これは「名にありて」です。

「私の名にあって、名の中に」

です。これは実名だから、名の中にはいって願えば、

「我これを成すべし」

と。だから、不可能はないんだよ。キリストの名に入ってしまう。

●助け手

15 汝等もし我を愛せば、我が誡命（いましめ）を守らん。16 われ父に請わん、父は他に助主（たすけぬし）をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。

「我、我」とおっしゃっているけれども、もっとはっきり言うと、

「私の出店を与えるぞ」

と。それが「助主（たすけぬし）」です。「パラクレートス」「助主」というのはいい訳です。「そこへ呼び

よせる」という字です。助けようとして呼びよせることを「パラカレオー」という。呼び出されたところの者。何のために呼び出されたかというと、助けようと思って呼び出された。だから、「助け」という意味が出てくる。

「助けるためにそこへ呼び出されたところの者」

です。

17 **これは真理の御霊なり、**

「真理の御霊」というのは「真理を現ずる霊」ということです。キリストの、神の無限無量の真理を現ずる霊です。ヘブライ人は、本当に真にそこに出てこなければ「真理」と言わない。頭で考えられた真理を真理とは言わない。実現しないような真理は真理ではない。

「本ものの御霊である。本ものを現ずる御霊である」

ということ。日本語の「本もの」というのはいい言葉だね。

「もの」はかなで書いた方がいい。日本語というのは素晴らしいよ。あるときは漢字で書きたくなるし、あるときはかなで書きたくなる。自由自在だ。そうすると、校正でもって、

「こっちは漢字なのに、こっちはまたかなになってダメじゃないですか」

と言って、機械的に直す。冗談じゃないぞと。だから、いわゆる専門の校正はダメなんです。本当は著者が書いたとおりにやっていかなければ。著者には微妙な言葉の使い方があるんだからね。点の打ち方だってそうなんです。機械的に句読点を打ったってダメなんです。だから、漱石だとか一流の文豪の文章は変えてはいかん。その言葉のまんまやっていかないと。文章というのは、文字そのものの構成が生きているからね。いわゆる文法ではない。文法は後から、ある法則をそこでもって規定しただけで、法則を破っているものがいくらでもある。生きた文法は、決してひとつの成り上がったものではない。文法それ自身が動かなければダメなんです。そういうことで日本語は一番流動性があるね。だから、日本語は難しい。

世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。

それはダメですよ、御霊を受けなければ御霊の真理は出てこない。

なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

これはちょっとキリストは先走ってものを言ってしまったけれども。本当は、まだまだ知りやしない。これは十字架を通らなければ、この聖霊は――真理の御霊は、御霊の現ずる真理は――やって来ないから。サウロみたいにひっくり返されて、それから十字架がはっきりわかった。どっちでもいいですよ。とにかく、十字架と聖霊の構造は絶対に離すことができない。

18 **我なんじらを遺(のこ)して孤児(みなしご)とはせず、汝らに来るなり。**

聖霊がないクリスチャンは「孤児」なんだ。聖霊がやってくると、これは孤児でなくなる。「孤

児」という言い方がおもしろい。孤児ではないぞと。

19 暫(しばら)くせば世は復(また)われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と。私が生きているのは、お前たちを生かすから、私は生かすキリストであると。キリストがただ生きたって何になるか。我々を生かすキリストだ。キリストは生きていらっしゃるから、お前たちを生かすと。

「われ活くれば汝らも活くる」

ということはそういうことです。

その人がいると、何だかしらないけれども、周りに力がきたり、明るくなったりする。キリストを受けとっていると、そういうことになる。そういうクリスチャンでなかったら、クリスチャンではないですよ。

「自分さえ救われたらいい」

なんて、ちっとも本当は救われていない。本当に救われている人は必ずひとを救うんだから。人を救うことのできないクリスチャンなんてものは本当は生きてない。本当は救われてない。はっきりとそう言ってもいいくらいです。

だから、皆さんは一人びとりが本当に道を伝える。私は「伝道」という言葉が好きなんだ。さっき言った「道」を伝える。みんな伝道者なんだ。キリストという道を伝える人、それが本当の証者です。証しているというのは、

「こういう経験をしました」

と言って証したってダメです。本質的に伝道者でなければ、証人(あかしびと)と言えないわけです。この伝道というのは口で言うのではない。存在そのものをもって道を伝えていることですよ、生活そのものをもって。それが本当の伝道者だ。私みたいに壇上でしゃべっているのはダメだよ。生活をもって道を伝えてなければ。それでは、そこまで。